多紀廣壽院、醫學館、每年百日之間、諸生教育之義、當分相止候、以來日々講書等有之候間、陪臣町醫等も、勝手次第罷出可致聽聞候、尤も委細之儀は、醫學館江可承合候、且又是まで年々醫學館江寄附銀致し來り候向々も、以來差出ニ不及候、

右之通、可被相觸候、

〔明良帶錄世職〕醫學館留守居役

三十俵二人扶持被下、六人相詰る、內四人他よりつとめ、內二人持ニて居付つとめ、

同御門番

御目附支配無役より出で、三十俵一人半扶持、御役扶持添、

同帳附

御門番と同じ役にして、御役料有之、但七人程、

同留下役

諸向より出役、醫學館御祭禮八月十二月にて日不定、但冬至ニは御祝有之、衆醫出仕有之、

〔醫學館附地所一件〕天保二年卯三月廿日、半八郎を以、善右衞門殿へ御下ゲ、

年番與力江

醫學館附町屋敷小石川片町、深川平野町地面貳ヶ所共、上り地相成、右爲代龍閑町火除土手築立殘地之內、上納地より、壹ヶ年金六拾兩宛永續爲御手當被下候段、肥後守殿被仰渡候、依之右金高年々正月七月兩度ニ、町年寄共方へ取立、御役所より相納候筈ニ候間、受取醫學館へ可被相渡候、

卯三月

〔元治二年武鑑〕西洋醫學所　池田多仲

〔文部省第一年報〕東京醫學校